

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0170501993		
法人名	有限会社ライフアート		
事業所名	グループホーム福寿荘Ⅱ 大地ユニット		
所在地	札幌市白石区北郷4条12丁目3-35		
自己評価作成日	平成29年5月17日	評価結果市町村受理日	平成29年7月4日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度の公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先URL	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/01/index.php?action=kouhyou_detail_2016_02_2_kan=true&JigyosyoCd=0170501993-00&PrefCd=01&VersionCd=022
-------------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉サービス評価機構Kネット
所在地	札幌市中央区南6条西11丁目1284番地4 高砂サニーハイツ401号室
訪問調査日	平成29年6月5日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・医療連携をとりながら、最期までホームで生活できるようターミナルケアを実施、又、必要に応じて専門医に受診し安心、安全に生活できるよう、条件を整備している。
 ・地域の方々と日常的に交流し、緊急災害時に支援してもらえる関係・体制作りができている。
 ・終末期であっても、その方の持てる力を発揮できる環境を作り、その方が望む生き方が出来る様家族と協力し、支援を続けている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は、北郷地区の利便性の高い閑静な住宅街に立地している。周辺には法人の2か所のグループホーム、道路を隔ててデイサービスがあり、日常的に協働している。理念は法人全体で共有し、職員の配置調整も円滑に行われている。また月例の社内研修には夜勤者を除く全職員が参加するなど、法人の運営システムが安定した利用者本位の質の高いケアサービスを支えている。事業所では、入居から終末の時までその人らしい生活環境を整えて、安心して過ごせる看取りケアを実践している。協力医による住診診療と密な連携、看護師の配置、長年の支援経験とその蓄積、さらに最新の認知症ケアの知識や技術の取り入れも充実し、重度であっても本人の持てる力を大切に食事や排泄、入浴支援等で工夫を重ね、「快」に繋げるケアを行っている。また、空間環境面では、皆が集う居間から死角に位置する居室は、個を尊重し落ち着ける居場所になっており、利用者本位のサービスの実践を特徴付けている。家族との信頼関係も構築しており、特に家族連絡ノートの活用により本人の理解や多面的支援の提供に活かしている。地域とも認知症ケアの専門ホームとして良好な応援と交流を深めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を 掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求 めていることをよく聴いており、信頼関係ができ ている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらい				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらい				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面が ある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域 の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある			○	3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係 者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理 解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表 情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満 足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく 過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにお おむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟 な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価及び外部評価結果

自己評価	外部評価	項 目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	一人を大切に・支えあう心・安心して暮らせる社会づくりを法人理念とし、一人一人の意志を尊重し、その人らしく生活できることを目標に日々取り組んでいる。	法人理念とケア理念は、玄関やスタッフルームに掲示し、職員は理念が記載されたカードを携帯している。日常のケア場面や会議、社内研修等で理念の共有と意識付けを図り、全職員で統一した支援に取り組んでいる。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会へ加入し、町内会行事にできる限り参加している。又、散歩時、通勤時など、隣近所の方々に積極的に挨拶する等、地域の一員としての意識を高め、気軽に交流できることに努めている。	祭りや盆踊りなどの町内行事に参加し、住民からは除雪や防災面などの応援や協力があり、日常的な交流を重ねている。地域には機会あるごとに認知症に関する情報を発信し、地域の一員としてのスタンスを大切に、相互の協力関係を築いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2か月に一回実施している運営推進会議で、町内会の方々とホームでの取り組みやケアの実施、又、通勤時等見かけた状況（高齢者が一人で不安そうにしている等）を町内の方々、包括スタッフと情報提供・共有している。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	日常的な取り組みや評価への取り組み改善等、その状況に関して報告し、話し合いながら質の向上を目指す機会としている。又、避難訓練へ参加いただき、緊急時の協力体制を作っている。	2か月毎に同法人のデイサービスと合同で開催し、家族や行政職員、複数の地域代表の参加により、事業所の現状について意見交換をしている。会議の場を通して地域の高齢者情報や相互交流、認知症啓発にも役立てている。	議事録は事業所内に掲示し周知を図っているが、全利用者家族に議事録を配布する事で、更に運営推進会議の意義や事業所の取組みの理解に繋げることが期待される。
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市主催のグループホーム管理者会議や研修、在宅ケア連絡会に参加し、連携を図れるようにしている。	運営推進会議には包括支援センター職員の出席を得て、現情の理解を図りながら協働関係を築いている。また、市や区の管理者会議や集団指導に参加し、連携を図っている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束はせず、センサーで対応。ホーム入口にはチャイムをつけ、自由な出入りを行い、出入りの際には必ず確認している。	身体拘束に関するマニュアルを整備し、職員は社内や社外研修に積極的に参加し、拘束をしないケアを実践している。年数回不適切なケアの事例研修により、日々のケアを検討している。日中は玄関を施錠せず見守りに努め、向かいのデイサービス職員の協力も得ながら、安全面に留意して自由な環境を提供している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	社外研修への積極的参加及び、通達を確認しながら職員への周知を行っている。又、研修内容を伝達し意識付けを行い、社内研修で学習し、防止の徹底を図っている。		

自己評価	外部評価	項 目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度の理解が出来るよう、社内及び社外の研修で学ぶ機会を積極的に持ち、入居者の状況に適切に対応できるよう、制度を活用している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	日常的にも疑問や不安があれば、その理解や解消に努め、入院や退去等その都度話し合いを行い、理解・納得を得られるよう努めている。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的な家族会の開催で、ご家族より出された意見をスタッフに周知し、運営推進会議で外部の方々にもお知らせしている。又、家族連絡ノートを活用し、気軽に意見や要望を寄せてもらっている。又、入居者の状態から意思や意向を捉えることは難しいが、表情・目の動きなど細かな観察で思いをしっかりと受け止め、支援を行っている。	利用者にとっての家族の重要性を認識し、共に支え合う関係作りを大切にしている。来訪時や電話等でコミュニケーションを図り、話し易い雰囲気とともに家族連絡ノートを活用して、家族や家族を通して本人の意向の吸い上げ、密な情報共有に努めている。また、年1回の法人家族会には半数以上の家族の参加があり、親睦に加えて意見を聴取する機会になっている。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月ユニット会議を開催し、又、社内研修、面談を行い意見や提案を聞くように努め、日常的にもスタッフノートを活用している。また、日々の申し送りでも意見や提案を聞くようにしている。	ユニット会議では、ケアサービスについて率直な意見交換が行われている。日常的に職員の意見や相談にはその都度応じ、社内研修や個人面談でも職員の意見等を聞く機会を設け、運営やサービスに活かしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期的なキャリアパス、面談、スタッフの自己改善計画書などを活用し、自分たちでやりがい等が持てる職場環境・条件整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月社内研修を行い、又、社外の研修にも積極的な参加を行っている。研修報告や面談で、職員一人一人の力量や実際のケアを把握しOJTを進めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	全国組織のネットワークを築いており、相互間の研修を共同して実施し、人材育成やケアの質の向上を図っている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前から家庭訪問を行い、話し合う機会を作っている。又、入居される生活の場をできる限り見ていただける様に、ホームに出向いていただくことも行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	同上、御家族とも十分に話し合えるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談を受けたらまず、今何の支援を必要としているのかを話し合い、緊急性の有無を確認し、他サービス利用も踏まえた対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者から学びを得ることは多々あり、職員はその入居者に感謝・尊敬の気持ちを持ちながら接している。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族や職員の話も交えながら、入居者自身を中心とした関係作りに努めている。入居者自身にご家族の話をしたり、その時の入居者の様子を御家族に伝えている。又、御家族からの手紙やハガキの読み聞かせも行っている。		
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が直接思いを伝えられないことが多く、家族を通じて働きかけてもらうなど支援し、一人一人の状態にあった方法を家族と相談しながら進めている。昔の写真を見てもらったり、ホームで撮った写真はいつでも見れるように、一人一人のアルバムを作っている。	家族の来訪は多く、ゆっくりと居室や居間で過ごせるように配慮している。利用者を訪ねて来る友人は多くはないが、家族の了解を得ながら来訪を歓迎し、今までの関係性が途切れないよう心掛けている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	本人の状態や周囲の環境に応じ、他者と交わったり職員が個別に対応するなど、一人で孤立することがないように努めている。特に職員が介入して入居者同士が顔を合わせるよう、場面を積極的に作っている。		

自己評価	外部評価	項 目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今までの関係はこれからも継続することを伝え、気軽に立ち寄ってもらえるよう働きかけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族からも情報を収集し、本人の立場に立ったケアプランの立案、実践、評価を通して、本人の思いや意向を捉える努力をしている。	日常の中で本人に寄り添い、意向の把握に努めている。何気ない言葉から終末の過ごし方などを受け留め記録している。発語が難しい場合は、表情や仕草、全体からの把握や家族の情報も重視し、本人本位の支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式を利用し、これまでの生活を家族からも伺えるよう働きかけている。又、来訪された御家族と話す中でも、昔好きだった事等、本人について伺うようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	センター方式の利用、又、日常的な申し送りや記録から、一人一人の日々の様子を職員全員で総合的に把握するよう努めている。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	チーム・家族・本人(難しい場合は意向)を含めて協同で作成し、期間に応じて見直している。又、本人に変化が生じた時には、その都度対応の検討・ケアプランの修正を行っている。	介護計画は、担当職員と計画作成担当者を中心に、職員全員の意見を取り纏め、2～3ヵ月毎に、また状態変化に応じて見直しを行い、新たな計画を作成している。個人記録で日々の計画に対する実施を確認し、次回の見直しに活かしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画に基づいた実践を日々記録しており、その結果をプランの見直しに繋げていく努力をしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	医療との連携(協力病院との連携や専門医への受診)。又、速やかに往診を依頼し、診察を受けられる環境を作っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域消防団と協同での防火訓練、訪問美容やマッサージ、クリーニング等のサービスの利用を行っている。地域の店(自転車屋、新聞店)ともつながり、外からの情報を入居者に伝えたり、外出時の車イスの整備などを行い、入居者にプラスになる様、利用している。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の定期往診があり、その他、入居者の状態変化があれば、連絡を取り、往診していただいている。又、希望や必要に応じて専門医への受診の援助を行っている。	希望のかかりつけ医の受診は家族対応が基本としているが、現在利用者全員が協力医の月2回の往診を利用している。緊急時の連携体制、事業所の看護師による日常健康管理や24時間オンコール体制が整い、医療面での安心を支えている。	

自己評価	外部評価	項 目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所に非常勤ではあるが看護師がおり、日常の健康管理や助言、対応を行い支援していると共に、協力病院との連携を日常的に行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	早期退院を第一に相談し、必要な情報を交換共有しつつ、入院中も安心して過ごせるように配慮し、支援している。		
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態に応じ、早い段階から、かかりつけ医、経営者、管理者、看護師と家族で随時話し合いの場を設け、その都度方針を確認合っている。	重度化した場合について、契約時や重篤の段階等で家族と医師、事業所看護師を交えて随時対応の方針を確認している。終末期や看取り支援を実施する方針の下で医療機関と密に連携を取り、職員間でケアの質を高めながらチームとして多数の実践経験を重ねている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	対応マニュアルに沿って実践している。場面場面でのケアの具体的方法や視点を確認している。		
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、地域の消防署と連携し、防火訓練を実施し、地域住民とも連携をとり、入居者も訓練に参加し、日常的に緊急時避難の具体的方法を身につけている。又、運営推進会議で消防職員から防災について話してもらい防災意識を高めるよう努めている。	年2回昼夜の火災を想定し、消防署の立会いや自主の訓練を実施し、地域住民の参加協力も得られている。運営推進会議で消防署の総評を報告して地域の防災対策と連携している。非常時の備蓄や防災備品を備えている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	トイレ、入浴時など他者の目に触れない様、最新の注意を払うと共に、排泄の有無は記号化し、他者の前ではトイレ等の言葉を用いないようにし、本人のプライドを傷つけない様にしている。	認知症疾患の理解や接遇を学び、利用者を尊重した支援に努めている。名前の呼び方や居室表札、入浴や排泄介助など、プライバシーや羞恥心に関わる場面には十分配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	すべてにおいて自己決定は難しいが、表情やしぐさから気持ちを読み取ったり、おやつや衣服を選択してもらえように複数用意したりと、可能な限り本人の意思を確認しながら支援するように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人の睡眠や覚醒のリズムを把握し、そのリズムを基本に生活の組み立てを行っている。又、本人のペースを尊重しつつ、体力や状態に合わせた生活の組み立ても考え支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	お化粧をしたり、訪問美容を利用し、一人一人がその人らしい身だしなみやオシャレができるよう支援している。又、その日に着る衣服を複数用意し、自身で選んでもらえるようにもしている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好みのものをメニューに取り入れ、箸やスプーンなど自ら食べられる工夫をし、食べる楽しみが継続するように支援している。又、職員と一緒に食事し、入居者の好みを把握する為、スタッフ間で情報共有している。軽食は数種類の中から好みの物を選択出来る様にしている。ご家族が持ってきてくれた物を摂ることもある。常に煮豆を常備している。	利用者個々の好みや身体状況を理解して、食事形態や内容、箸や食器の工夫、個別のペースに応じた食事時間などに配慮し、自分で食事を味わう事ができるように支援している。年中行事や旬の料理のほか、誕生日には赤飯や寿司など好きな献立を選んでもらったり、家族や近隣住民のお裾分けも皆で楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	摂取量、水分量をしっかりと把握し、チームで情報共有しながら、必要な時に必要なものを、しっかりと摂れるよう対応している。ゼリーを常に3種類用意する等、形状や硬さを工夫したり、嚥下状態によって個別メニューを用意することもある。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れやにおいが生じないように、毎食後、一人ひとりの航空状態や本人の力に応じた航空ケアをしている	入居者の状態に合わせた方法で支援している（口腔ケア用ガーゼ、スポンジの使用等）。又、歯科医からのケアの方法を伝達、実施している。歯科往診時に口腔ケアの評価をいただき、常に技術の向上も行っている。		
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンや排泄メカニズムをしっかりと理解し、トイレでの排泄を支援している。又、排泄サインを見逃さず、トイレでの排泄が集中して気持ちよくできるように、声掛けも極力少なくするように努めている。	排泄の記録により個別の状況を把握し、重度者であってもトイレで自然な排泄ができるよう自立支援に取り組んでいる。衛生用品の使用を検討し、日中は布パンツで気持ちよく過ごせるよう個々のサインを見逃さず支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	可能な限り、自分の足で歩く様に支援し、飲食物に関しては、ヨーグルトやオリゴ糖を用いたり、寒天ゼリーを食べる等し、水分量に配慮するよう努めている。内服薬（下剤）は極力中止し、食物繊維（ファイバー）を使用し、排便を整える取り組みを行っている。		
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	心身状態を把握し、配慮しながら実施している。又、本人の意向は捉え難いが、納得して心地よい入浴ができるよう支援している。一人一人の状況に合わせて、午前や午後と入浴時間を変えている。	週2～3回午前・午後の時間帯で、本人の身体状況や気持ちに沿った入浴を支援している。その時の状況によってシャワー浴や複数介助など柔軟に対応し、利用者が気持ちよく湯船に入って入浴できる環境作りをしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室で休めない時、職員が添い寝をしたり、リビングで一緒に過ごしながら休息をとるなど、一人一人の状態に合った方法や環境を把握し対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の重要性をしっかりと理解し、効能と副作用についてチームで確認し、その変化の有無をしっかりと把握できるよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外気に触れたり外を眺めたりする時間や、好みの音楽を聴くなど、暮らしの中で自然にできる支援を行っている。又、本人の状態や覚醒状況に応じて、リビングで過ごしてもらっている。		

自己評価	外部評価	項 目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日や、入居者に状態に合わせて、外の空気を吸ったり風に当たるなどの支援もしている。又、外出できない時に縁側やテラスを活用し、外気やお日様に当たる工夫をしている。	天候の良い時期は、近隣の公園に散歩に出掛けたり、町内の行事や向かいのデイサービスで開催の認知症カフェに出掛ける利用者もいる。外出が難しい場合は、事業所のテラスに出てお茶を飲んだり花を眺めるなど、外気に触れて気分転換の機会作りをしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	実際にお金を使うことはないが、本人の安心につながる支援の方法を検討している。(お財布に少額の小銭を入れて身の回りに置いておくだけで安心するなど)		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	実際には困難であるが、家族に生活の様子や日常的な会話等を記録等を活用し、伝え支援している。又、家族から届いた手紙・ハガキの読み聞かせをしている。		
52	19	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節や行事に合った花や、タペストリーで雰囲気作りに努め、絵画や適切な明かりで、安心感が持てるよう工夫している。又、共同空間を温かみのある空間にするよう工夫している。	対面式の台所と食堂兼居間、10畳の和室が設置された共用空間は、家庭的な装飾が施され、整理整頓が行き届いた清潔感のある環境である。各ユニットで雰囲気が異なり、利用者の心身の状況に応じて照明や陽射しの強弱、生活音やテレビ音量の調節などをして、極力不快感を取り除き、居心地良い寛ぎの環境作りをしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	本人の馴染みの物を持ってきてもらい、居室内で心地よく過ごせるよう工夫している。又、居間のソファや一人掛け椅子を利用し、心地よく一緒に過ごす時間を過ごせるよう工夫している。		
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の馴染みの物を持ってきてもらい、居室内で心地よく過ごせるように配慮している。又、臥床時にも本人の好きなもの、馴染みの物が見えるように工夫している。	居室は、皆が集う居間から死角の位置にあり、個を尊重した落ち着いた環境を重視している。クローゼットには日用雑貨が整理され、家族写真や趣味の手作りの品、使い慣れた家具等が持ち込まれている。配置等は本人や家族と相談し、安心して過ごせる居室に配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	テーブルや椅子の形や配置を工夫し、安全でかつ、自分の力を発揮して生活できるように心掛けている(状態や状況に合わせて配置を変える)。		